慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウィリアム・ゴドウィン研究文献（四）：人口論争をめぐって
Sub Title	William Godwin bibliography (4)
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.12 (1960. 12) ,p.1056(36)- 1071(51)
JaLC DOI	10.14991/001.19601201-0036
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601201-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

ウィリアム・ゴドウィン研究文献（四）

——人口論争をめぐって——

白井厚

マルサスが名を隠して「人口論」初版を出した時、彼自身その序文で、執筆の動機を「この論文はもとゴドウィン氏の『研究者』中の貪慾と浪費についての論文に対し、私が一友人とかわした会話に由来する。この議論は将来社会の改善に関する一般的な問題を提起するに至った。そこで、著者は、最初、この友人に対し、会話で出来ると思われるよりはもっと明確に自分の考えを紙上に表明したいと考えて、机に向ったのであった。」[1]と説明している。この友人とは実は彼の父 Daniel Malthus であって、ルソーの友人であり、ゴドウィンの思想を弁護することを光栄と考えていた。

父ダニエルは、マルサスの研究家によれば、柔和で感傷的な性格を持ち、ルソーに傾倒して「エミール」を好んで読んだ。一七六四年の春スイスの Môtiers でルソーと会い、ルソーもまた一七六六年イギリスへ旅してダニエルの家に立ち寄り、ダニエル夫妻の訪問も受けたようで、ダニエルがルソーに宛てた手紙がいくつか残っているし[2]、ヒュームがルソーに宛てた手紙にもダニエルの名が認められる[3]。ダニエルはルソーの遺言執行人（executor）の一人といわれるが、その関係は以上の程度しかわかっていない[4]。いずれにしてもダニエルは、子供ロバートに対してエミール的教育を施したであろうが[5]、それが、ゴドウィンをめぐる論争を通じて〝イギリスにおけるフランス革命〟の火消し人を育ててしまったことは、皮肉な運命といわねばならない。

「人口論」は、大体に人口論の叙述、平等主義の批判、従来の人口論批判の三つの内容を含んでいて、マルサスはヒューム、ウオレス、コンドルセ、ゴドウィン、スミス、プライスなどを論争の対象とし、特にゴドウィンの平等論に対しては、十九章中次の六章を当ててその攻撃を集中している。

第一〇章

ゴドウィン氏の平等社会——人類の惡徳を全て社会制度に帰する誤り——人口増加に由来する困難に対応する第一策としてゴドウィン氏の提案するところは、到底十分とは考えられない——ゴドウィン氏が実現出来ると思っている平等な社会制度の美観——それは人口の原則だけによっても、僅々三〇年を出ないうちに全く瓦解するだろう。

第一一章

両性間の情慾は将来滅滅するだろうというゴドウィン氏の臆説——この臆説にはほとんど根拠がない——恋愛の情は、理性または徳性とは両立しがたいものではない。

第一二章

ゴドウィン氏の人命無限延長説——人間の精神に与えられた刺戟が肉体に及ぼす影響についての推論は当を得ていないことを種々の例によって証明する——右の臆説は何ら過去の事実に根拠を有しない、従って何ら学問的に価値ある説とは云い難い——人間は、地上において漸次不死の方へと進化しつつあるというゴドウィン氏並びにコンドルセ氏の説は、懐疑論の矛盾を示す一好例に過ぎない。

第一三章

ゴドウィン氏は人間をあまりに合理的であると考え過ぎている——複雑な生物たる人間は、事物を解するに当って常に強い情慾のために判断を乱される——強制に関するゴドウィン氏の推論、人より人に伝え得ない性質についての或る真理。

第一四章

ゴドウィン氏の政治的真理に関する五つの命題、彼の全著はこれにかかっているが、支持し難いものである——人口の原則から起った困難により、人間の悪徳と道徳的弱点とは全く取り除き得ないとわれわれが想像する理由——ゴドウィン氏が使っているような言葉の意味で、人間はその完全性を持っていない——人間の真の完全性ということの例証。

第一五章

あまり完全な手本を示すことは、改良を促す理由とはならず、かえってそれを阻害することがある——ゴドウィン氏の貪慾及び奢侈論——社会に必要な労働をうまく万人に分担させることの困難なこと——労働を嵎倒することは、現在に弊害をもたらすばかりであって、将来の改善に資するところは、ほとんどまたは全くない——農業労働を大いに盛んにすることは、労働者にとって常に有利である。

時代の寵児として名声の頂点にあったゴドウィンに対し、無名のマルサスがこのように攻撃を加えて後間もなく、一七九八年八月に両人はロンドンで会い、文通も交わされた。ゴドウィンの手紙は不明であるけれども、おそらく平等社会においては prudence が人口過剰を抑制するであろうこと、また今日の社会では、農業の拡大が私有財産の結果妨げられて人口増加が不当に抑えられていることを説いたと推察されている[6]。

これに対してマルサスは、要点次のような返書を書いた。

「オールベリにて、八月二〇日（一七九八年）

「或る国が、最も異常な努力によって、生活資料と人口との極点に達するものと、想像し得るとすれば、われわれは、極度に重い人口の圧迫は、しばしば起るきゝんと流行病のかたちで、特に労働の報酬が少ないというかたちで、感ぜられるだろうと想像する理由があります……

「私は、提議されている目的が極めて望ましいと認めることから出発しました――それは全ての不必要な労働の廃止と、社会の全ての成員に対する必要労働の平等な分配とであります。私はまた、現在の社会構造を論じるにあたって、少しも政府のある特定の形態に関説するものではなく、単に所有者の階級と労働者の階級との存在に、物々交換及び交換の制度に、また自愛心という一般的原動力となる原則に関説するに過ぎないことを、前提しなければなりません……

「……全ての奢侈の廃止と財産のより平等な分配にもかかわらず、労働者の種は依然として、労働に対する需要とその支持のための基金の状態とによって左右されるように思われます。

「あなたが人々に対する妨げとして論じている慎慮とは困難の予見を意味し、この困難の予見はほとんど必然的にそれを除去しようという願望を意味します。これらの困難を除去しようとする自然な一般的な願望が、何故に、社会の必要労働の平等な分配の全ての機会を破壊しかつ私が前に述べたような事態を生み出すような競争をひき起さないかという適当な理由を、あなたは私に与えることが出来ましょうか？

「現在の社会形態が最大の実際的人口を妨げるという理由でこれに反対するあなたの意見は、ある程度あなたの慎慮の主義に対する反対意見ともなりましょう。あなたのこの主義の目的は、私の考えるところでは、人口を常に食料の範囲内のかなり内側に維持しておくことにありましょう。しかるにこの主義が広く行われて、食物の量を絶えず増加する必要を除いたほどになれば、耕作は今日よりもなおはるかに徐々にしか行われないというおそれが大いにあります。私が現在の社会形態を是認するのは、私自身は、正しい理論の法則に従って、個人的自由と一致して等しく耕作と人口とを促進させ得る何かほかの形態を認め得ないからにほかなりません。社会の状態には大なる進歩が起るでありましょう。だが私は、現在の形態または制度が、いかにして再び野蛮状態に逆転する危険なしに、根本的、本質的に変更され得るのかわかりません。現在認められている人類の制度の欠陥はあるけれども、私は決して、社会において感じられている困苦の最大部分がそこから起ったものとは考えません。過大な人口による窮乏を防止するための慎慮の必要を是認することこそ、その責を公けの制度から個人の行為に移すものであります。そしていくらかの競争の自由がある政府の最悪の形態の下においてもほとんど、労働者の種は、結婚をせず、従ってその数を減少することによって、直ちにその境遇を改善し得べく、また政府の最善の形態の下においても、結婚して著しくその数を増加させることによって、彼らは直ちにその境遇を悪化せしめるであろうことは確実であります。全ての人類の制度はおそらく不完全であり、従って常に非難を免れぬものであるから、私の判断し得る限りにおいてそれが全く責任のない害悪をそれに負わせることは、確かに正当ではありません。そして人類の制度を変更しようとする全ての企図において、予め出来るだけ精密に、どれだけの害悪がこれらの制度に帰せられるべきであり、またどれだけがそれと絶対的に無関係であるかを確かめるのが、最も重要なことと私には思われます。(7)」

(1) T. R. Malthus; An Essay on the Principle of Population, as it affects the future improvement of society, with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet and other writers, 1798, ed. by J. Bonar, p. i. 高野・大内訳一一頁。

(2) L.-J. Courtois; Le Séjour de Jean-Jacques Rousseau en Angleterre (1766-1767), Lettres et documents inédits, 1911.

(3) Streckeisen-Moulton; J.-J. Rousseau, ses amis et ses ennemis, 1865, tome II, pp. 278, 281.

(4) 伊藤久秋「マルサス人口論の研究」昭和三年、「マルサスの父とルソー及びヒュームとの関係」参照。

(5) マルサスは一六歳の時 Gilbert Wakefield の只一人の弟子となったが、彼もまたルソーの崇拝者で、英国教会の牧師から非国教派に変った。

(6) 伊藤久秋「マルサス対ゴッドウィンの人口論争」「商学討究」第九巻「百年忌記念マルサス研究」一九三四年一二月号所収。

(7) C. K. Paul; William Godwin: his Friends and Contemporaries, 1876, vol. I, pp. 321~5.

このような文通による論争は、やがて再び著作を舞台とするようになった。一八〇一年には、ゴドウィンによって Thoughts occasioned by the Perusal of Dr. Parr's Spital Sermons, being a reply to the attacks of Dr. Parr, Mr. Mackintosh, the author of an essay on Population, and others. が書かれている。これは急進主義思想に対する弾圧、ゴドウィンに対する攻撃が高まってきた時の反論であって、人口論の著者とはもちろんマルサスを指す。パーは A Spital Sermons, preached at Christ Church, upon Easter Tuesday, April 15, 1800, 1801. においてゴドウィンの普遍的博愛観を非難し、マッキントッシもまたしばしばゴドウィン攻撃の演説を行なったのである。(1)

この書において、ゴドウィンはパー及びマッキントッシに対しては烈しく反撃したにもかかわらず、マルサスに対しては極めて好意的であった。

「私はいつわらざる賞讃と尊敬の念をもって人口論の著者に接する。彼の議論の一般的な調子は、彼の精神の寛大さに最高の名誉を与えるものである。彼は私と私の説に対して、憎悪や侮辱を加えようとするものではない。彼はわれわれの間の問題が、政党の題目や党派の術策となったことがないかのように内輪に論じた。彼は、あたかも証拠の探究と真理の発展以外には何ら目的がないかのように議論した。」

「この著者は、おそらくより高く私の尊敬を要求する。少しもてらわない淡白な筆法をもって、あらゆる学問の虚飾を斥けて、彼は経済学に対して、過去一〇〇年におけるどんな著者にも劣らない明白疑いない貢献をなしたと私は思う。彼の著作の壮大な命題と梗概とは、斬新であると同時に決定的であることが見出されよう。私自身としては、私の著者がこのような価値多き論文を生み出す機会を与え、また刺戟を与えた点にある誇りを感じないわけにはいかない。」

そしてゴドウィンはマルサスの人口法則を認めていた。

「私はこの著者の比率を十分に承認し、少しも彼の理論の基礎を害せんとしているのではないことを想起せられたい。私の企図は彼の結論に反対する仕事に限られる。」

「本著者の労作の基礎たる人口と食料の増加率を、私は攻撃の余地なきものとして、経済学に対する貴重な一貢献と見る」

ゴドウィンは、フランクリンがアメリカについて示した資料を見て、北アメリカにマルサスの人口法則が行なわれていることを承認し、またイギリスの人口と食糧の関係についてもこの法則を認めた。それでは差異はどこにあるか？　マルサスは、人口増加を妨げる要因として、罪悪と困窮しか数えなかったが、ゴドウィンは第三の要因を認める。

「増加しつつある人口に対し、われわれの住む国において極めて有力に広く作用しているもう一つの妨げは、徳であろうと慎慮であろうと誇りであろうと、婚約の普遍性と頻々たる再婚とを不断に抑制する感情である。早婚は、わが国においては成長せる少年少女の間では普通に行われぬことである。極めて通常の程度の先見という資質を持つ者は誰でも、このような重大な約束を結ぶ遥か以前に熟慮する。彼は繰返して、その結婚によって子供をどうして養い得るかを自問する。この問題が最初に再三の検討を受けることなくしては、イギリスにおいてはほとんど結婚は行われない、と私は信じる。」

このことはおそらくゴドウィンの手紙においても示されたこととと考えられるが、マルサスはこの批判によって、人口論第二版において道徳的抑制を認めることとなった。

（1）ゴドウィンの思想が当時の社会に及ぼした影響及び反動攻勢などについては、拙稿「ウィリアム・ゴドウィンの生涯と思想――特に『研究者』を中心として――」「経済学年報」4参照。

マルサスはすでに一八〇〇年に、無署名で An Investigations of the cause of the Present High Price of Provisions. を出版して、人口論第二版を出すことを約束し、初版に対する批判は下層階級の引き続く抑圧と貧困の真の原因を発見したという彼の信念を強めたにすぎないと云っている。その第二版は、次のように題名を改めて一八〇三年の末に出版された。An Essay on the Principle of Population; or, A View of its Past and Present Effects on Human Happiness; with an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions.

これは再版となってはいるが、全く別の著作と云ってもよいほど内容の変更を見た。(1)

第一に、初版は八ッ折版三九六頁約五万五千語であるのに対し、これは四ッ折版六〇〇頁二〇万語以上に拡大されている。第二に、初版は幾分即興的な、タイムリーな論争の書であったが、資料を集めて大陸を旅した後の二版はようやく実証的な体裁を整えて専門学術書の風を呈したこと。第三に、初版がゴドウィンを中心とした完全可能思想・平等思想攻撃に主力を注いだのに対して、再版では救貧法に対する攻撃が中心となったこと。これは、当時の支配階級の代弁者的存在であったマルサスの関心の推移を表わすものである。

この二版において、マルサスは Bk. III, Chap. III. Observations on the Reply of Mr. Godwin. と題してゴドウィンに次のような解答を示した。

「私がゴドウィン氏の体系に反対する唯一の理由は、これを実行しようとする試みは著しく社会の罪悪困窮の量を増加するに至るであろうという私の深い確信である。もしゴドウィン氏がこの確信を排し、たとえ理論の上だけでも――いやしくもその理論が理路一貫し、人類の性情に関する知識に立脚する限り――彼の体系は真に地球上から罪悪と困窮を駆逐する傾向があるということを証拠立ててくれるならば、彼は私においてその最も確固たる最も熱烈な主張者の一人を見出すことを期待してよい。(2)」

「ゴドウィン氏が、指摘し推賞したいと熱望する唯一の最後の妨げは、『徳であろうと慎慮であろうと誇りであろうと、婚約が拡がり再婚が増えるのを常に抑制する感情』である。この感情――それは私がすでに道徳的抑制の名の下に述べた――について、またもっと包括的な名である予防的妨げについては、本書の続篇で私が大いに重点を置くことがわかろう。従ってこの妨げ自体は私は全く是認する。だが私は、ゴドウィン氏の政治的正義の制度はその普及に好都合だとは決して考えない。早婚の傾向は極めて強力であって、われわれはそれに打ちかつためには求め得るあらゆる助力を必要とする。従って、どんな仕方においてであろうと、私有財産の基礎を弱め、かつ個人がその慎慮から得ることの出来る十分な利益と優越性を何らかの程度において減少すべき傾向の

ある制度は、愛の情慾に対する、何らかの有効な効果を期待し得る唯一の重圧を、除くことにならざるを得ない。ゴドウィン氏は、彼の制度においては、『家族数が多いことの悪結果は、現在のように赤裸々に各人の利害に訴えてこないだろう』と認めている。しかし残念なことに、これまで人間の性格について知っているところによれば、ゴドウィン氏が斥けるこの個人的利益に対する赤裸々な訴えがなければ、われわれは合理的な成功の希望をもち得ないといわねばならぬ。[3]」

マルサスは、現実の社会においてはゴドウィンの説を容れ、道徳的抑制の作用を認めることに説を改めた。

「本書の全体を通じて、私は原理において著しく前版と意見を異にし、罪悪又は窮乏のいずれの項目の下にも属さないもう一つの人口に対する妨げが可能であると考えるに至った。そして、後の部分において、私は初版の最も苛酷な結論のあるものを緩和しようと努めた。[4]」

だが理想社会については、自愛心、自利心が有効に働かないという理由で頑強にゴドウィンを斥けたのである。両者の道徳的抑制という考えの間には、次のような相違が認められる。㈠マルサスにおいてこの場合理性は利己心に基いてのみ作用し得るが、ゴドウィンの理性は本来何ら利己的でない人性に備わる能力であり、外界の印象を受けて自由に開展し得ること。㈡マルサスは理性（従って道徳的抑制）に調節的作用を認めるだけで、これに実際上大きな期待をかけないがゴドウィンにおいては理性は万能であること。[5]

ゴドウィンへの解答をなすこの章は、四版まで収録されたけれども、一八一七年の五版では削られて、代って平等主義に関する章が一つ増えた。初版で六章を占めたゴドウィン論は、五、六版では遂に一章を留めるだけとなったのである。すなわち第三篇第二章として初版の第一〇章が残り、また第三章、平等の制度について（続き）において、

「私がその判断力を大いに尊敬している一部の人々は、ここ数年来私に忠告して、本書の中の平等制度、ウオレス、コンドルセ及びゴドウィンに関する部分は、著しい程度に興味が失われたことでもあり、また人口理論の説明、例証を主題とするこの論文とは密接な関係はないから、新版においてはむしろ削除するのが適当ではないかという。平等論のこの部分は、主題の基礎をなす研究に導いたものであるから、これに対して私が多少の偏愛を持つのは自然であるが、これを別としても、私は本書の中に、平等制度に対する、人口原理に立脚した答弁が与えられるべきものだと思う。[6]」

として、新しくオウエンを取り上げた。オウエンの A New View of Society に対する反対理由は、平等社会には活動の動機が消滅すること、及び人口法則の作用からである。

「オウエン氏は十分これを感知し、その結果、その理想とする社会状態の下において人口増加から生じる困難を克服すべき何らかの方法を案出しようとして、全幅の創意を傾注したのである。しかも彼が、非常に不自然不道徳または苛酷ならざる対策を遂に全く示し得なかったということは、類似の試みを企てた他の全ての古代人及び現代人の同様の失敗と共に、人口理論に基く平等制度反対論は、理論上においてすら、合理的な反駁の余地がないという証拠になる。[7]」

結局マルサスは、道徳的抑制を容認しても、平等思想排撃、私有財産擁護の態度は少しも変らず、社会の下層階級に対しては、今や慎重自制が生活改善の唯一の手段であると説教するに至ったのである。

（1）「最も確信に満ちた経済学者でも、マルサスによって理解された人口原理は何か、または何がマルサスの人口理論かと問われたならば、その答えをためらうであろう。」（E. Cannan; A History of the Theories of Production and Distribution, in English Political Economy from 1776 to 1848. 3rd ed., p. 134.）

（2）T. R. Malthus; An Essay on the Principle of Population, 2nd ed., pp. 381～2.

（3）Ibid., 2nd ed., pp. 385～6. 4th ed., pp. 55～6.

（4）Ibid., 2nd ed., Pref. p. vii.

（5）伊藤久秋、前掲書、二四〇頁。

（6）T. R. Malthus; An Essay on the Principle of Population, 6th ed., vol. II, p. 38. 寺尾琢磨訳（昭和二三年版）四五一頁。

（7）Ibid., p. 48. 寺尾訳四五八―九頁。

このように、マルサスがゴドウィンの主張した道徳的抑制の作用を現実に認めながら、しかも頑強に平等社会の理想を拒否して、その名声をますます高めたのを見て、二年間の異常な努力の後に、ゴドウィンは息子ウィリアム及び H. B. Rosser, D. Booth[1] の助力を得て、Of Population. An Enquiry concerning the Power of Increase in the Numbers of Mankind, being an Answer to Mr. Malthus's Essay on that Subject, 1820. を出版した。ポールによれば、

「おそらく『政治的正義』を除いては、彼の著書の中でこれほど彼が魂を打ち込んだものはないようだ。細心周到な注意をもって書き続け書き改めた記録のない日は一日もない。[2]」

これは次のように構成されている。

第一篇　古代及び現代におけるヨーロッパ、アジア、アフリカ、南アメリカの人口。

第二篇　人口の増加力及びその限界について。

第三篇　人口を減少または抑制する諸原因について。

第四篇　北アメリカ合衆国の人口について。

第五篇　地球が人間の食糧に与える手段について。

第六篇　人口論において説かれた道徳的政治的命題について。

この書において、彼は先ず人口数に関して、(1)マルサスはその主張を変えたこと、(2)地球の可耕面積は未だ全て人間によって満たされてはいないこと、(3)人口増加の比率は実際にはマルサスの主張の通りではないこと、(4)経験の教える例はマルサスの主張と異なること、を論証しようとする。

その論旨は極めて錯雑しており、整理するのに困難を感じるが、N・E・ハイムズによる要約を示すと、

(1)人類には生活資料より速く増加する力も傾向もない。アメリカではなくスエーデンの増加率を、成長が妨げられない場合の典型と考えるべきである。われわれは、実際増加ではなく減少を恐れるべきだ。

(2)マルサスの云うような傾向はあるが、それを恐れる理由はない。というのは人口は常に制限されているから。人口の原理は断続的に発作的に働く〝気まぐれの原理〟である。それは単純な法則の結果として起るのではないし、その作用も一様ではない。

(3)率は証拠不十分である。生活資料は人間と同じように速く増加され得る。

(4)過剰人口の危険は〝切迫した直接的な〟ものではなく、遠い所にある。ゴドウィンは第一の回答で、それは〝数万世紀〟も先と云った。

(5)マルサスの社会経済的な結論は、彼の主要命題が事実に反していると同様に反対すべきものである。彼は死を社会改善の試みに委ねる。彼が賢明な社会政策として提出する結論は、キリスト教の教義に全く反する。

(6)マルサスの第二公準は正しくない。性結合の衝動は、彼が仮定するようにどこでもいつでもどんな人にでも一定ではない。

(7)問題はそれが生じた時に解決するであろう。何故なら、一方で食物は増加しているであろうし、他方出産率の低下が起っているであろうから。[3]

ということになる。特にポーランド、南アメリカ、スペイン領アメリカなどにおける稀薄な人口は、人類が出生によって増加していない決定的な証拠だと指摘しているし、また出産能力のある女性は人口の五分の一に過ぎず、夫婦間の子供の平均は四人を越えていないから、人口の増加は最も順調に進んでも二倍になるのには百年を要すると述べ、マルサスの云うように二五年で人口を倍にするためには、一組の夫婦の間に八人の子供が必要だと計算して、マルサスの背理を論証しようとした。[4]

また

「文明化した人間は、土地の野生の果実を食べて生きる人間ではなく、大部分人類の勤労によって成熟したものを食べて生きる人間である。従って世界に生まれたあらゆるものは、食物という生活資料を生産する新しい手段である。そして社会に加えられる全ての成員は、このような資料を生産する新しい手段である。[5]」

「文明社会における各人は、彼自身が必要とするよりも遙かに多量の食物を生産する力を持って、生まれるのである。[6]」

と主張して、生活資料の増加について極めて楽観的な考えを示し、貧困の原因を社会制度に帰する態度を変えなかった。このように、彼の「人口論」は、マルサスの単純な級数論に対して多方面から反撃を企だて、いくつかの正しい指摘を含みながらも、不正確な資料と混乱した論理はこの書をマルサス批判としては完全な失敗作たらしめた。[7] マルサスは一八二五年に、「人口論」第六版の附録に次のような一文を附けて、冷やかに古き論敵の努号を黙殺した。

「本書の最終版刊行後、ゴドウィン氏からの返答が現われた。しかしそれは内容から見てもまた態度から見ても、恐らくこれに対する答弁の必要を認めない点において、公平有能なあらゆる真理探究者が必ずや私に賛成されるに相違ない性質のものである。ロぎたない言葉で応酬するのは読者のためにもならず、私にとっても不愉快である。そしてアメリカ、アイルランド、イングランド、その他諸国の人口増加に関する最も顕著な、最も疑問の余地のない事実を否定し、ヨーロッパにおいて最も貧寒な国の一つであるスエーデンをもって、食物の最も豊富な場合における自然な人口増加を判定すべき標本と見なすような人と真剣に事を論じる事は、明らかに著者自身にとって何も得るところはなく、また真理の樹立に協力する読者が一人として要求する筈がない。[8]」

ただし、ゴドウィンの「人口論」にはいくつかの反応があった。

その一つは、この書が翌年に Recherches sur la Population, et sur la Faculté d'Accroissement de l'Espèce humaine; contenant une Réfutation des Doctrines de M. Malthus sur cette Matière; par William Godwin. Traduit de l'Anglais par F.S. Constancio, D. M. etc., Paris, 1821. 二巻として仏訳されたことである。ただしこれには訳者の序文が無いので、フランスにおいてどのような評価が与えられたかというような翻訳の事情は明らかではない。

また The Edinburgh Review, or Critical Journal, July 1821; vol. XXXV, pp. 362〜377. には、無署名ではあるがマルサスが書いたのではないかと想像される評論が載っている。[9]

「われわれはゴドウィン氏のこの出版で驚かされた。それは、われわれは告白するが、われわれが最初にこの評論の生涯を始めて以来、名のある論者の書いたもので最も貧弱なかつ最も老婆めいた業績であるように思われる。」

「……この書は高価であり他人によって持ち出されたり、引用されない限り――これはその問題の取扱い方からして予期され得なかったことであるが――われわれはそれに触れようという考えはなかった。しかし大いに驚いたことには、それがロンドンにおいてである読者階級にいくらかの印象を与えたことを、われわれは聞いた。そしてもっと驚いたことには、最近の救貧法改訂法案の討論のあった際に、それは、すぐれた判断者の意見によれば人口増

「マルサス人口論綱要」の解説一六五頁以下参照。「エディンバラ・レヴィヴ」の書評はプレースの移民量測定方法に対しても攻撃を向けたので、彼はその反批判を試みている。

（2） C. K. Paul; ibid., vol. II, pp. 258～9.

（3） N. E. Himes; Editor's Introduction to *Illustrations and Proofs of the Principle of Population by Francis Place*, pp. 23～4.

（4） W. Godwin; Of Population, pp. 28～9.

（5） Ibid., p. 464.

（6） Ibid., p. 485.

（7） 『人口論』は、この哲学者の文筆が老境に入ったことの最初の決定的な証拠であった。」（F. K. Brown; The Life of William Godwin, 1926, p. 336.）「ゴドウィンは、人口の増加は決して正確に幾何級数的ではあり得ないこと（それはマルサスの認めるところであろう）――アメリカは例外であること（例外は規則を証明するという公理にも拘らず）――合衆国において人口は倍加しつつあると想像するためには、出生に関してはそれは旧世界と同一であると考えねばならない（換言すれば事実は傾向と等しい）――正常な増加はアメリカのそれではなくて、正常な増加が非常に厳しい制限の下で起るに違いない（とマルサスは答えよう）ところの、スエーデンの増加であること、を論ずることによって、それを喋舌したと考えている。借りたやかんをこわしたことを責められて、年老いたアイルランド女は三つの答弁をした。――それは私が受け取った時にこわれていた、私が返した時は完全であった、私はそれを受け取ったことがない、と。同様にアメリカ植民地についてのゴドウィンの見解は三つの矛盾した命題の間をさ迷っていた。人口の大増加は自然的（あるいは自然発生的）であるが、食物の増加はもっと大きい。人口の大増加は自然的ではなくて、移民による。大増加は全然なかった。読者の前にはその一つを選ぶべき三つの議論がある。そして読者が、ゴドウィンと共に人口は何らの妨げも必要とせず気まぐれな原理だということを結局において信じさえするならば、この議論を確信するかということはほとんど問題ではない。」（J. Bonar; Malthus and his Work, 1924, pp. 369～370. 堀・吉田訳五〇六―七頁。）

（8） T. R. Malthus; ibid., 1826 ed. vol. II, p. 498, or 1890 ed., p. 586. 寺尾訳八四二頁。

（9） 吉田秀夫『人口論』を繞る論争――『平等主義』を中心として――」「大倉学会誌」改巻第一号、昭和八年六月。

（10） Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, 1810–1823, ed. by J. Bonar, 1887, p. 198. The Works and Correspondence of David Ricardo, ed. by P. Sraffa, vol. IX, p. 84. 中野正訳一四三頁。

（11） Ibid., pp. 206～7. (ed. by Bonar), pp. 89～90. (ed. by Sraffa) 前掲訳一五八頁。

（1） David Booth は English Analytical Dictionary の著者で、ゴドウィンの友人。彼のために統計と計算を助け、特に第二巻の議論に貢献して、"Dissertation on the Ratios of Increase in Population, and in the Means of Subsistence" という題目で執筆している。その内容については小林時三郎訳加の比率に関するマルサス氏の叙述が全く無根拠のものであることを証明した立派な著作であるとして、下院議員によって関説せられたことを、われわれは知った。このことがあったから、捨てて顧みなかった本書を再び見直すことにしたのである。」

そして人口増加率に対する反批判、マルサスは低賃金の主張者かという問題、救貧法などについて論評が加えられている。リカードゥはこの筆者をマルサスと考えて、マルサスに次のような書を寄せた。

「私は、『エディンバラ・レヴィヴ』に掲載された『ゴドウィンに関する非常に見事な批評を読みました。私は、たしかにこの執筆者を知っているはずだと思います。あれは非常によく出来ていて、ゴドウィンの無知と不信とをあますところなくあばいています。」（一八二二年九月二八日）

『エディンバラ・レヴィヴ』に掲載された人口に関する論文の筆者に関する疑いを、私は数人の人に話してしまいました。今後は云わないことにしましょう。マーリとプレイスについては、何事も聞いていません。」（一八二二年一〇月一二日）

（2） C. K. Paul; ibid., vol. II, pp. 258～9.

（3） N. E. Himes; Editor's Introduction to *Illustrations and Proofs of the Principle of Population by Francis Place*, pp. 23～4.

（4） W. Godwin; Of Population, pp. 28～9.

（5） Ibid., p. 464.

（6） Ibid., p. 485.

（7） 『人口論』は、この哲学者の文筆が老境に入ったことの最初の決定的な証拠であった。」（F. K. Brown; The Life of William Godwin, 1926, p. 336.）「ゴドウィンは、人口の増加は決して正確に幾何級数的ではあり得ないこと（それはマルサスの認めるところであろう）――アメリカは例外であること（例外は規則を証明するという公理にも拘らず）――合衆国において人口は倍加しつつあると想像するためには、出生に関してはそれは旧世界と同一であると考えねばならない（換言すれば事実は傾向と等しい）――正常な増加はアメリカのそれではなくて、正常な増加が非常に厳しい制限の下で起るに違いない（とマルサスは答えよう）ところの、スエーデンの増加であること、を論ずることによって、それを喋舌したと考えている。借りたやかんをこわしたこ

ゴドウィンの人口論は、実質的な影響力を持たず、マルサスの名声の前にほとんど黙殺されるべき運命にあったかと見えた時、F・プレイスが Francis Place; Illustrations and Proofs of the Principle of Population: Including an Examination of the proposed Remedies of Mr. Malthus, and a Reply to the Objections of Mr. Godwin and Others, 1822. を書いた[1]ことによって意外な反応を招くこととなった。

プレイスは無頼漢の子に生まれ、ズボン製造人となって洋服店を開くに至り、急進主義者として代議士J・ヒュームと共に巧妙に団結禁止法を撤廃させたことで有名である。彼は、苦労した自分の経験からして、マルサスの認めるに至った道徳的抑制は全く実行不可能であって、その空想的なことはゴドウィンの理想論と変らず、人口法則に抵抗する手段は避妊以外にはないことを強く主張して、新マルサス主義の真の先駆者となった[2]。この書は Illustrations and Proofs of the Principle of Population by Francis Place, being the first work on population in the English language recommending birth control, now exactly reproduced with an introduction demonstraiting Francis Place as the founder of the modern birth control movement, together with unpublished letters of Place on birth control, Coleridge's criticisms of Malthus' views on birth control, crit-

ical, and textual notes by Norman E. Himes, Lond., 1930.
として再刊され、研究に便宜を与えている。その内容は、

序論

第一章　マルサス氏とゴドウィン氏間の人口問題についての叙述
——「人口論」に対するゴドウィン氏の最初の解答——二度目の解答——「人口増加力に関する研究」。

第二章　スエーデンについて。その人口——死亡率表——出産の力——スエーデンは人口において特別の利益を得ているというゴドウィン氏の主張の検討と反論——北アメリカ合衆国との比較。

第三章　北アメリカ合衆国。

第一節——序文——問題の説明——スエーデンと比較して出産による人口増加——ヨーロッパから合衆国への移民——グレイトブリテンとアイルランドから——議会の報告書——セイバート博士の合衆国の統計記録——アメリカの移民法——移民の数——外国旅行者に関するイギリスの法律——一八一一年から一八二一年の間アメリカ合衆国への船数、トン数、及び旅行者の数——アメリカにおけるイギリス軍からの脱走者——最近二五年間の移民数。

第二節——合衆国における出産による人口増加——例——ヘンガム地区——ポーツマス——合衆国の主要都市における生命の価値——スエーデンにおいて——比較——ゴドウィン氏の資料から、合衆国における人口数の出産による急速な増加の証明。

第三節——アメリカにおける子供の数——スエーデンにおける——成人の数——一組の結婚における子供の数——育てられる子供の数——両方の国における子供を育てる女性の数——比較——アメリカの社会はスエーデンよりもはるかに人口増加に適している。

第四章　ディヴィド・ブース氏の「人口と生活手段の増加比率論」。

第五章　古代国家における人口について——外国における人口減少——人間制度の害悪——例——ペルシャ——エジプト——モンテスキュー——人口の原理に関するゴドウィン氏の説明。

第六章　食物が供給されるよりも早く増加する人口数を妨げる手段。

第一節——この手段に関するマルサス氏とゴドウィン氏の考え。

第二節——食糧より早い増加を妨げる手段についてのイングランド人の状態。

第三節——食糧より早い増加を妨げる手段についてのこの著者の考え。

第七章　イングランドの人口について。

第一節——序文——歴史の最初の時代——ブリトン人——ジュリアス・シーザーの侵入の頃には住民は非常に少ない——ローマ人——人口増加——歴史の第三の時代——サクソン人とデンマーク人——人口はおそらく増加しなかった、一〇六六年のノルマンの征服の頃には二〇〇万位と考えられる。

第二節——歴史の第四時代——一〇六六年のノルマンの征服から

一三三九年のエドワード三世によるフランスの侵入まで——この時代に人口は大いに増大した。

第三節——歴史の第五時代——一三二七年エドワード三世の即位から、一四八五年ヘンリー七世の即位まで。

第四節——歴史の第六時代——ヘンリー七世の即位から、一六八八年の革命まで。

第五節——歴史の第七時代——一六八八年から、現代まで。

第八章　イングランドにおける死亡数の減少について。

第九章　人々の福祉に役立つ資本の蓄積について——資本増加よりも速い人口増加の結果について——鋤の耕作——人口は生活資料を圧迫するか——アイルランドの例——人口増加——低い賃金——無知——病気。

第一〇章

結論——政治経済学に対するゴドウィン氏の矛盾——彼の著作で説かれている理論を押し進めることは出来ないし、人々の条件も政治経済学の適当な知識なしには、物質的に永遠に改善されない。

附録一

一七九〇、一八〇〇、一八一〇年のいくつかの人口統計を取る場合の、合衆国の範囲、州及び準州数の範囲について。

附録二

イギリス諸島から北米合衆国への移民の数について。

となっており、ゴドウィン批判が大部分を占めている。プレイスの序文によれば、

「彼の書は議会で称讃され、さまざまな出版物の中で讃辞と共に引用された。そして公刊物によっても多くの知識人によっても、人口原理の満足すべき反論だと主張された。ゴドウィン氏の書を読むと、人口の原理に関しては、それ以前の書物と同様に、マルサス氏の著作を論破しているようには見えない。私には、これは全く論証を欠いたもっともらしい試みのように見えた。そこで私は彼の論拠を分析し、彼が引用した証拠を検討した。[3]」

そして彼はゴドウィンの議論を批判し、マルサスの人口論を前提として産児制限の結論を引き出す。

「もし特に、夫婦がその健康を害することなく、また婦人の優雅を失うことなくして避妊の手段を利用することが決して恥じるべきではないことが十分に理解されれば、人口が食物以上に増殖しようとする傾向は直ちに効果的に阻止され、罪悪と貧困とは社会から著しく除去され、そしてマルサス、ゴドウィンその他一切の博愛主義者の目的は、大衆の安易、知識及び道徳的行為の増加によって促進されるであろう。この手段はたとえ人民が放任されていても必ずや早晩採用されるに至ると確信する。[4]」

何故に、プレイスはすでに忘れられつつあるゴドウィンを批判の対象に取り上げたか？　彼はベンサムに傾倒して自由放任思想を抱く功利主義者となり、リカードゥに劣らず賃金鉄則を固く信じ、マルサスの「人口の原理」を読んで賃金基金説を信奉するに至った。

だがマルサスの救済策は、すでに述べたように彼にとっては実現不可能のことである。また実際に〝急進主義者のズボン造り〟として、自由主義思想を抱いて労働者教育にあたり、出版の自由、団結禁止法の廃止、穀物条例の廃止などの運動を進めた彼にとって、全ての貧困や悪徳を急速な人口増加だけの責任にすることは出来なかった。他方彼はゴドウィンを支持する空気がまだ労働運動の指導者の中にあることに恐怖を感じていた。有名な「政治的正義」を信奉する人が、ゴドウィンの「人口論」によってマルサスの「人口論」を誤って理解することは彼には許せなかったのである。

そこでプレイスは、マルサスもゴドウィンもその考え方があまりに極端であり、真理はその双方の側に、あるいはその中間にあるものと考えた。ここには彼のブルジョア急進主義者としての立場が、すなわちマルサス主義を脱却出来ない立場が明瞭に表われている。彼は貧困の直接の原因を政治形態や財産制度に認めつつも、人口増加の負担が賃金基金を脅かすという考えに執着していた。こうして生まれた具体的な提案が産児制限であって、これは理論的にも発生史的にも、マルサスの人口論と賃金基金説の申し子である。従ってプレイスの書は、マルサスよりも主としてゴドウィンの批判から展開されるということになる。

プレイスは団結禁止法を撤廃させるのに黒幕として大きな役割を果したけれども、これは労働者の主体的運動の結果ではない。プレイスがその手段としてJ・ヒュームやJ・R・マカロックを仲間に入れ、ベンサム主義者達の支持を得て禁止法撤廃を実現したというだけでなく、労働者が賃金のかけひきを行なうことは、他の一切の商行為におけると同じく、いささかも禁止すべきでないというプレイスの信念からこの運動が始まったのである。彼は団結禁止法を廃止すれば、労働者の賃金は人口の増加率によって定まるという経済鉄則を労働者が認識するようになり、組合は減少すると確信していた。[5] 労働者が自由を得てストライキが激発した時、プレイスとヒュームは、軽率にストライキをすれば、その結果廃止されたばかりの諸法律が再び立法化されるであろうと指摘して若干の組合を抑制しようと努力した。[6] その産児制限案にしても、これがブルジョアジーの手によって改良策として推進された時、しばしば労働運動と衝突し、社会主義の解毒剤として支配階級の手によって利用されたことは人のよく知るところであろう。

貧困を社会制度の責に帰し、財産制度の変革によって事態を改善しようとしたゴドウィンの思想が、先に反動的なマルサスの「人口の原理」を生み出し、これに反論したゴドウィンの「人口論」が、今またブルジョア的な新マルサス主義を呼び起してしまったことは、まことに皮肉な現象と云わねばならない。

（1） プレイスには別に Remarks on Mr. Godwin's Enquiry concerning Population, 1821. がある。

（2） 寺尾琢磨「新マルサス運動の先駆者フランシス・プレースとその時代」「三田学会雑誌」二七巻四号（昭和八年四月）参照。N・E・ハイムズによれば、一八〇〇年以前にも産児制限の考えは散見されるけれども、これは影響が弱く、社会運動としては、明らかにそれは一八二〇年から始まる。というのは、一般民衆を説得する最初の組織的な努力がF・プレイスによって開始されたのは、まさにこの年であるから。（N. E. Himes; ibid., p. 52.）

（3） F. Place; Illustrations and Proofs, p. IX.

（4） Ibid., p. 165.

（5） *Cf.* G. Wallace; The Life of Francis Place, 1771—1854, 1918, p. 217.

（6） G. D. H. Cole; A Short History of the British Working-Class Movement 1789-1947, 1948, p. 60. 林・河上・嘉治訳一〇五頁。

〔附記〕

「ウィリアム・ゴドウィン研究文献（一）」（五二巻一〇号）に掲げた文献目録に、今回の人口論関係の文献及び次のものを追加する。

J. Alger; Englishmen in the French Revolution, 1889.

Ch. Cestre; La Révolution française et les poètes anglais (1789-1809), 1906.

Defence of the Character and Conduct of Mr. W. Godwin, 1803.

E. Dowden; Life of P. B. Shelley, 1886.

Ch. Findlater; Liberty and Equality, 1800.

Th. Green; An Examination of the leading Principle of the new System of Morals, as that Principle is stated and applied in Mr. Godwin's Enquiry, in a letter to a friend, 1799.

Th. Holcroft; Memoirs of the late Th. Holcroft, 1816.

W.-T. Laprade; England and the French Revolution, (1789-1797), 1909.

Marshall; Life and Letters of Mary Wollstonecraft Shelley, 1889.

W.-C. Proby; Modern Philosophy and Barbarism, or a Comparison between the Theory of Godwin and the Practice of Lycurgus, 1798.

A,Cobban; The Debate on the French Revolution 1789—1800, ed., 1950.

T. Ramm; Die Grossen Sozialisten als Rechts-und Sozialphilosophen, 1955.

水田珠枝「変革思想としての無政府主義——ゴドウィン『政治的正義』における人間変革の問題——」「名古屋大学法政論集」第一三輯、一九五九年一二月。

大久保嘉三「市民社会の信念の諸形式(一)」尾道経済文化研究所所報第六輯、一九六〇年四月。